

紹介患者さん診療・検査事前予約ご利用のご案内

医療機関用 外来診療・検査事前予約 FAX予約

待ち時間を短く患者さんが円滑に診療・検査を受けられるように、病院及び診療所の先生から『事前予約』をお受けしております。

●予約方法

①「紹介患者さん事前予約申込FAX用紙」に必要事項を記入し、地域連携室までFAXで送信してください。



②直ちに、予約をお取りし、「予約受付票」をFAXで送信します。ただし、受付時間外のFAXについては、翌営業日の朝にご連絡いたします。



③患者さんに以下をお渡しください。

- ・予約受付票
- ・診療情報提供書(紹介状)
- ・フィルム等



④ご来院時、患者さんには以下をお持ちいただきます。

■先生から受取ったもの

- ・予約受付票
- ・診療情報提供書(紹介状)
- ・フィルム等

■別に必要なもの

- ・健康保険証
- ・お薬手帳又はお薬のわかるもの
- ・診察券



..... 予約受付先

●京都市立病院地域連携室

TEL (075)311-5311(代) (内線2113)

FAX **(075)311-9862(専用)**

●事前予約医療機関専用電話

(075)311-6348

事前予約受付時間(日曜・祝日を除く)

平 日/8:30~20:00(木曜日は17:00まで)

土曜日/8:30~12:00

FAXは、24時間お受けしています。

地域連携相談業務

平 日/8:30~17:00(月曜日~金曜日)

患者さん用 紹介患者さん事前予約センター 電話予約

先生からの紹介状があれば、患者さんからのお電話で、ご自身のスケジュールに合わせた予約をお取りいただくことができます。

※担当医師の指定、検査の予約はできません。

●予約方法

①お電話をされる前に、患者さんには以下をお手元にご用意いただきます。

- ・事前予約申込票(必要事項記入済みのもの)
- ・診療情報提供書(紹介状)
- ・診察券 ※初診でもご予約可能です。



②患者さんから『事前予約センター』へお電話いただきます。

専用電話番号 **(075)311-6361**



受付時間/月~金(9:00~17:00)

※土・日・祝・年末年始(12/29~1/3)を除く

●ご予約は前日17:00まで受付しております。

▶電話予約時に確認させていただく内容

- ・患者さんのお名前(漢字・ヨミガナ)
- ・生年月日・性別
- ・ご連絡先(電話番号等)
- ・紹介元医療機関名・予約診療科



③ご来院時、患者さんには以下をお持ちいただきます。

■先生から受け取ったもの

- ・事前予約受付票(必要事項記入済みのもの)
- ・診療情報提供書(紹介状)
- ・フィルム等

■別に必要なもの

- ・健康保険証
- ・お薬手帳又はお薬のわかるもの
- ・診察券

健康診断や人間ドック、各種検診で「要精密検査」となった場合でも、上記と同様の手続きで事前予約が可能です(初診でも予約可)。ぜひご利用ください。

※ただし、市立病院で人間ドックを受けられた場合は、健診センターでの予約となります。

専用の申込用紙は、京都市立病院のホームページからダウンロードが可能ですので、ぜひご利用ください。



地方独立行政法人 京都市立病院機構

京 都 市 立 病 院

地 域 連 携 室

〒604-8845 京都市中京区壬生東高田町1-2

TEL 075-311-5311(内線2115) FAX 075-311-9862

事前予約医療機関専用電話(地域連携室直通) 075-311-6348

<https://www.kch-org.jp/>

京都市立病院

連携だより

vol.41
令和3年7月

- 『小児外科』のご紹介
- 切れ目のないがん診療を提供するコーディネーター—腫瘍内科の役目—
- 『乳腺外科』のご紹介
- 検査事前予約ご利用のご案内

京都市立病院機構理念

京都市立病院機構は

- 市民のいのちと健康を守ります
- 患者中心の最適な医療を提供します
- 地域と一体となって健康長寿のまちづくりに貢献します

京都市立病院憲章

- 1 質の高い安全な医療を提供するとともに、地域の医療水準の向上に貢献します。
- 2 患者の権利と尊厳を尊重し、心のこもった医療を提供します。
- 3 救急や災害時における地域に必要な医療を提供するとともに、地域住民の健康の維持・増進に貢献します。
- 4 病院運営に参画する事業者等とのパートナーシップを強め、健全な病院経営に努めます。
- 5 職員の育成に努め、職員が自信と誇りを持ち、全力で医療に従事できる職場環境を作ります。

「小児外科」のご紹介



総合外科 副部長

遠藤 耕介

この度、京都市立病院総合外科 副部長として赴任して参りました、遠藤耕介と申します。小児外科を専門としています。平成15年に京都大学を卒業、5年間の外科研修を神戸市立中央市民病院（現 神戸市立医療センター中央市民病院）にて行ったのち専門を小児外科に絞り、大阪赤十字病院、兵庫県立こども病院、北野病院にて研鑽を積んで参りました。

● 小児外科とは

小児外科は16歳未満の小児を対象とする外科です。消化器外科領域を中心として泌尿器や呼吸器などの領域の小児症例についても担当します。

小児外科では、先天性疾患などの多岐にわたる小児外科特有の疾患を扱っております。また、鼠径ヘルニアのように成人と同じ病名でも治療法が異なる疾患もあります。急性虫垂炎などの成人にも見られる疾患については、原則として中学校卒業までを小児外科で担当いたします。

小児は成人に比較して体格が小さく、発育の途中にある臓器の機能は未熟で予備力に乏しいという特徴があります。こういった特徴を理解した上で治療を行う必要があり、成人の手術とは異なった考え方や経験を必要とします。

● 当院の小児外科診療体制

これまでは、原則として短期入院症例を対象として治療を行って参りました。小児外科医の常勤化に伴い、今後は長期入院を要する症例についても当院での治療が可能になりました。当院小児科が得意とする分野である血液・悪性腫瘍の領域や、新生児症例についても外科手術を含めて当院で治療が完結できる体制を整えて参ります。

また、小児外科救急疾患についても小児科をはじめとして他科と連携をとって対応します。子どもは症状を的確に訴える事ができません。腹痛・嘔吐・腹部膨満などの不定愁訴や、「何となくぐったりしている」といった症状で受診されます。診断が困難なことも多いですが、そういった中にも外科的対応が必要な症例が隠れています。診断のつかない段階でも当院にて精査を進めさせていただきますので、お気軽にご相談ください。

● 小児外科の主な対象疾患

消化器疾患	泌尿器疾患	呼吸器疾患
鼠径ヘルニア、臍ヘルニア、急性虫垂炎、胃食道逆流症、肥厚性幽門狭窄症、腸重積、腸回転異常症、胆道拡張症、胆石症、特発性血小板減少性紫斑病、遺伝性球状赤血球症、Hirschsprung病 など	停留精巣、膀胱尿管逆流症、腎盂尿管移行部狭窄症、真性包茎、尿管遺残 など	先天性嚢胞性肺疾患、気胸、漏斗胸 など

● 当科の特徴

子どもにとって手術の傷は一生残るものになります。少しでも患児の負担を減らし、傷を目立たなくするため、当科では積極的に内視鏡手術（胸腔鏡および腹腔鏡）を導入しています。写真は腹腔鏡下脾臓摘出術を行った患児の写真です。この手術を開腹で行う場合、点線のような切開が必要になります。私は内視鏡外科技術認定医（小児領域）を取得しておりますが、これは全国で53人、近畿で9人のみが取得している資格になります（2021年5月末時点）。



写真：腹腔鏡下脾臓摘出術の傷

現在、当科で内視鏡手術の適応としているのは鼠径ヘルニア(LPEC)、虫垂炎、胃食道逆流症、肥厚性幽門狭窄症、胆石症、血小板減少性紫斑病(ITP)、遺伝性球状赤血球症、胆道拡張症、腎盂尿管移行部狭窄です。食道閉鎖症や横隔膜ヘルニア、先天性嚢胞性肺疾患などについても患児の状態が許せば内視鏡手術が適応可能です。今後、体制を整えて適応疾患を拡大していく予定です。

皆様のご指導を賜りながらこの地域の小児医療の発展のために精進して参ります。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

経歴

- 京都教育大学附属高等学校 卒業
- 平成15年 京都大学 医学部 卒業
- 神戸市立中央市民病院（現神戸市立医療センター中央市民病院）外科
- 大阪赤十字病院 小児外科
- 兵庫県立こども病院 小児外科 医長
- 田附興風会医学研究所 北野病院 小児外科 副部長
- 京都市立病院 総合外科（小児外科） 副部長

資格

- 外科学会専門医
- 消化器外科学会専門医、指導医
- 消化器がん外科治療認定医
- 小児外科学会専門医
- 内視鏡外科技術認定医（小児外科領域）
- がん治療認定医

頭頸部、体表	新生児疾患	小児悪性腫瘍
正中頸嚢胞、梨状窩瘻、類皮嚢種 など	<u>食道閉鎖、横隔膜ヘルニア、十二指腸閉鎖、小腸閉鎖、鎖肛、壊死性腸炎</u> など	神経芽腫、肝芽腫、腎芽腫、胚細胞腫瘍（奇形腫 等） など

（下線は内視鏡手術の適応疾患）

切れ目のないがん診療を提供する コーディネーター

—腫瘍内科の役割—

腫瘍内科 部長

桐島 寿彦



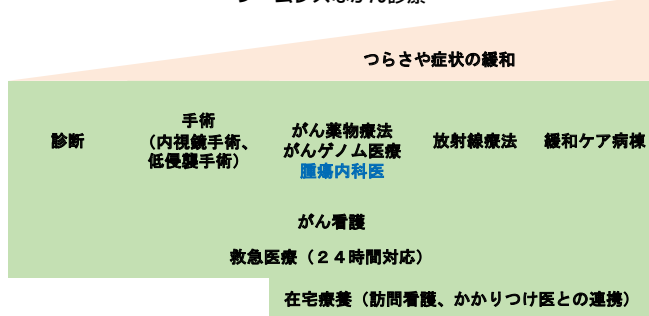
はじめに

腫瘍内科は2016年4月に設置された診療科で、今年で6年目になります。当初は消化器がんを中心に原発不明がんなどの治療に難渋する症例の診療を行っていましたが、がん患者の増加と2019年から保険診療でがんゲノム医療が始まったことから、腫瘍内科の診療ニーズが高まり、2021年4月から3人体制へ拡充しました。当科での取り組みをご紹介します。

当院のがん診療の特徴

当院では、がんの診断から手術（内視鏡治療、低侵襲手術）、がん薬物療法、がんゲノム医療、放射線治療、緩和治療（緩和ケア病棟）までのがん診療をワンストップで提供できることが特徴です。また、本人や家族の意向を尊重し、早期から院内他科やコメディカルとも密接に連携を取り、患者さんが望む治療や生活ができるように努めています。今後、高齢化が進み、独居等の生活上の不安を抱えたがん患者さんが増加することが想定されます。当院は、救急医療も充実しており、治療中に病状の変化があっても24時間に対応することができます。また、病状が進行しても患者さんが望めば緩和ケア病棟へ入院することも可能で、地域の訪問看護ステーションやかかりつけ医とも密接に連携しているため、患者さんが治療途中で転院したりする必要がなく、切れ目なく安心してがん診療を続けることができます。このように、患者価値を重視し、地域に密着したがん診療を提供できることが当院の強みです。

がん診療のバリューチェーン
シームレスながん診療



腫瘍内科の診療概要

腫瘍内科はがん診療の4つの柱である手術、薬物療法、放射線療法、緩和療法のうち、主に薬物療法を扱います。さまざまな臓器のがん薬物療法の知識を有しているため、従来の臓器別の縦割りの診療ではなく、臓器横断的ながん薬物療法を行うことができます。

がん薬物療法に専門的な知識を持った医師が、抗がん剤治療の必要な固形がんの患者さんを中心に診療を行っています。診療科の枠を越えた集学的治療や原発不明がんや希少がんなどの困難症例の薬物療法に強みを発揮します。

がんの遺伝子異常に基づいて、より効果の高い薬剤を選択するがんゲノム医療にも力を入れており、適応のある患者さんに対しては、保険診療になったがん遺伝子パネル検査を積極的に行い、推奨薬が見つかった場合は医師主導治験や企業治験に繋げています。治療の経過中にアドバンス・ケア・プランニングを取り入れ、患者さんや家族の意向を尊重し、早期よりコメディカルや地域の医療・介護従事者とも連携して、患者さんに最適な治療や望む生活が行えるようにコーディネートする役割も担っています。また、がん薬物療法だけでなくがん性疼痛などの苦痛の緩和も積極的に行い、患者さんが安心して治療が続けられるようにサポートします。

代表的な診療疾患

- ・食道がん ・胃がん ・大腸がん ・胆道がん
- ・肝がん ・膵がん ・悪性腹膜中皮腫
- ・神経内分泌腫瘍 ・甲状腺がん
- ・頭頸部がん ・卵巣がん（腹膜がん）
- ・原発不明がん ・性腺外胚細胞性腫瘍
- ・悪性軟部腫瘍 ・その他悪性腫瘍一般

得意分野

- 1) 消化器がんなどの得意分野に加え、その他の固形腫瘍に対するがん薬物療法にも対応します。

2) 2019年12月よりがん遺伝子パネル検査を開始し、遺伝子異常に基づいたがん治療を行っています。また、2020年4月からがんゲノム検査外来を開設し、院内外からがん遺伝子パネル検査を希望される患者さんを受け入れています。

診療体制

部長……桐島寿彦 臨床腫瘍学 がん薬物療法
医長……宮川昌巳 臨床腫瘍学 がん薬物療法
招聘医師…中島貴子 臨床腫瘍学 がん薬物療法

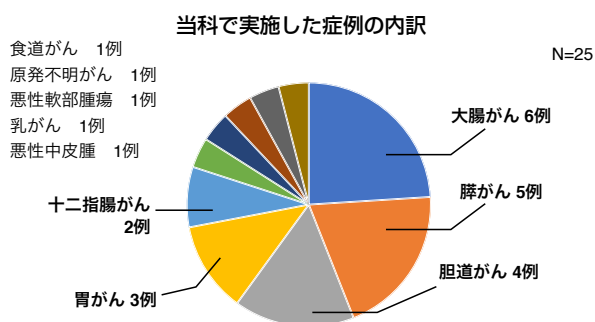
スタッフは日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医・指導医、日本がん治療認定機構がん治療認定医・指導医、日本内科学会総合内科専門医などの資格を有しています。

2021年4月より京都大学医学部附属病院 次世代医療・iPS細胞治療研究センター 中島貴子教授を招聘し3人体制で診療を行っています。

	月	水	金
腫瘍内科外来	桐島	中島	宮川
がん遺伝子パネル検査外来	桐島	中島	宮川

診療実績

2020年4月から2021年3月の1年間に当科で25例にがん遺伝子パネル検査を実施しました。そのうち7例に遺伝子異常に基づく治療薬が見つかり、4例は医師主導試験や保険適応薬投与などの治療に結びつきました。



推奨薬が見つかった症例一覧

がん種	検査	遺伝子異常	薬剤
1 胆道がん	NCC Guide OP	TMB high	キイトルーダ
2 胃がん	FoundationOne CDx	EGFR amplification	アービタックス
3 胆道がん	FoundationOne CDx	BRCA2 Q1379*	リムパーザ
4 大腸がん	FoundationOne CDx	MAP2K1 K57N	メキニスト
5 大腸がん	FoundationOne CDx	BRAF V600E	メクトビ、ピラフトビ、アービタックス
6 食道がん	FoundationOne CDx	FGFR1 amplification	ヴォトリセント
7 胆道がん	FoundationOne CDx	FGFR2 rearrangement	ペマジー

がんゲノム医療とは？

がんゲノム医療とは、主にがんの組織を用いて、多数の遺伝子を同時に調べ(がん遺伝子検査)、遺伝子変異を明らかにすることにより、一人一人の体質や病状に合わせて治療を行う医療です。全国にがんゲノム医療中核拠点病院やがんゲノム医療拠点病院、がんゲノム医療連携病院が指定されています。当院はがんゲノム医療連携病院に指定されておりがんゲノム医療中核拠点病院である京都大学医学部附属病院と連携し、がんゲノム医療を推進しています。

当院で実施可能ながん遺伝子パネル検査はFoundationOne CDxがんゲノムプロファイルとNCC Guideオンコパネルシステムで、いずれも保険適応になっています。末梢血からがんの遺伝子変異を検出することができるGuardant360は自由診療として実施しており、同じくFoundationOne Liquid CDxがまもなく保険診療で実施可能になります。



●中島教授からのメッセージ

京都市立病院が実践する理想的な地域がん診療モデルの中で、個々の患者さんにとって最善で最適ながん診療を提供するとともに、最新治療のチャンスにより多く患者さんに提供していきたいと考えております。お気軽にご相談ください。

おわりに

最新のエビデンスに基づいた、がん薬物療法を提供するだけでなく、患者さんが望む生活が続けられるように患者価値を重視した診療を心がけています。がん薬物療法が必要な患者さん、診断に難渋する患者さん、がんゲノム医療を希望される患者さんがいらっしゃいましたらお気軽にご紹介ください。

「乳腺外科」のご紹介

乳腺外科 部長

森口 喜生



新型コロナウイルスの蔓延が長期化する中、皆様も大変な日々を過ごされているかと思います。乳腺の領域でも検診から治療に至るまで大きく影響を受けており1日も早い終焉を願うところです。

さて、この度は当科の診療と乳がんの遺伝子検査の動向について紹介させていただきます。

当科の基本方針は最新のエビデンスに基づいて、外科療法、薬物療法、放射線療法などの最適な治療を提案し個々の患者さんのご意見や価値観を考慮した最善の治療を行うことです。

当科のスタッフは、部長 森口喜生（日本乳癌学会乳腺専門医・指導医）、副部長 末次弘実（日本乳癌学会乳腺専門医・指導医）、医長 西村祥子（日本乳癌学会乳腺専門医）、専攻医 何佳曦の4名です。おじさん二人と女性二人でチームワークを大切にしている日々の診療に臨んでいます。



診断では視触診の後に超音波検査、マンモグラフィ（トモシンセシス2019年に新規更新）が基本ですが、必要に応じてMRI、CT、PET-CT等の画像診断や穿刺吸引細胞診、マンモトーム生検、針生検などの病理検査を行い、精度の高い診断を行っています。超音波検査では病変が描出されないがマンモグラフィで悪性を疑う石灰化病変にはステレオガイド下マンモトーム生検を行っています。



手術においては、乳房再建手術にも注力しています。乳房切除術や広範囲な部分切除が必要な症例では形成外科と連携し自家組織による再建術やインプラントによる再建術を積極的に行い根治性と整容性の両立を図っています。

乳癌の薬物療法は、分子標的治療、ホルモン療法、化学療法など多岐に渡り新規の薬剤も日々登場してきます。進行度、病理所見、多遺伝子アッセイ（自費）などのデータや最新のエビデンスをもとに治療方針を決定します。術前化学療法のうち適応症例には治療期間を約2/3に短縮したdose-dense化学療法を行い治療成績の向上、治療期間の短縮に努めています。

近年、遺伝性乳癌卵巣癌症候群（HBOC）が注目されています。BRCA1/2遺伝子の変異が原因で乳癌、卵巣癌、腹膜癌などのリスクが高まることがわかっています。診断に用いるBRCA1/2遺伝子検査は高額な検査ですが、2018年6月に「転移もしくは再発乳がん患者」に対して保険適応となり検査で変異を認めた患者にはオラパリブ投与が可能となりました。2020年4月には「HBOCが疑われる乳がん若しくは卵巣がん患者」にも保険適応となり早い段階での検査が可能となりました。乳癌症例でHBOCと診断されれば術式決定（乳房切除術か部分切除か）に役立ち、また頻度の高い対側乳癌や卵巣癌の予防のための「対側乳房のリスク低減乳房切除術」や「リスク低減

卵管卵巣切除」（いずれも2020年4月より保険適応）の選択が可能となりました。当院でも、今後積極的にリスク低減手術に取り組んでいきたいと考えております。

また当院はがんゲノム医療連携病院としてがんゲノム医療を実施しております。標準治療を終了した進行再発の乳癌症例にもがんゲノム医療を行っています。適応症例があればご紹介いただければ幸いです（詳細は遺伝診療部のページをご覧ください）。

当院の乳がん診療の特徴は、乳腺外科医、放射線診断医、放射線治療医、病理医、緩和ケア医、放射線技師、検査技師、看護師、乳がん看護認定看護師、薬剤師、MSWの多職種が個々の患者の情報を詳細、迅速に共有し最良な診療を実施していることです。今後も患者様とご家族、市民そして地域の医療機関から信頼される乳腺外科を目指して参ります。何卒ご指導、ご鞭撻賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



乳腺カンサーボードミーティング



多職種病棟カンファレンス